

---

# 恋人は魔王さま？

砂那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋人は魔王さま？

### 【Zコード】

Z3076P

### 【作者名】

砂那

### 【あらすじ】

誕生日を迎えて二十五歳になつたけれど、まだ恋をしたことがない響子。恋なんてめんどくさい。恋なんてしなくてもいい。そう思つていたのに。よりによつて超絶美形、しかもかなり非道な魔王様に気に入られてしまった！ そして無理矢理、異世界に拉致されてしまい…。無事に元の世界に戻れるのか？

## 運命の出逢い？

「……ねむう」

椅子に座つたまま、横を向いてあぐびをした。  
がたん、がたんと電車の音が鳴り響いていて、ますます眠気を増長させる。しかも今日は、初冬だとのうに暖かい。小春日和というやつかもしない。

始発から乗るので大抵は座れる。でも長い通勤時間、電車に揺られているとわざがに眠くなる。そうでなくとも朝早いのに。  
そのとき。

（あ、しまつた……）

マナーモードにしておくのを忘れた携帯が、軽快な音でメールの着信を告げる。周りを気にしながら携帯を開くと、友人からのメールが届いていた。

（こんな朝早くからなんじやいな）  
クリックしてメールを開く。

【やつほー、響子。四捨五入で三十だね。おめでとうー】

（な、なんてお祝いの仕方だ。嫌がらせか？ そもそもなんでわざわざ四捨五入するのだ。それにあんただつて同じ年でしじうがつ）  
震える手で携帯を握り締め、そして周囲の視線を感じて慌てて微笑む。向かい側に座っているおばあちゃんが、心なしか怯えている。どんな顔をしてたんだ、私は。

そう。

私、林田響子は本日で二十五歳になつたのだ。

（二十五かあ……）

窓から見えるのどかな風景を、ぼんやりと見つめる。

二十五歳という年齢に、特に感慨はない。誕生日だつて、ただこ

うして日常が続いていく中の、代わり映えのない一日に過ぎないのだ。

平凡な人生。

けれどそれは、自分が平凡な人間だからなのだろう。それが悪いとも思わないし、平穏に毎日を過ごせるのは幸せだ。でも、思ってしまう。

何か、心が躍るような出来事はないだろうか、と。

（まあ、誕生日だからって特に何か起こる訳じやないけどね……）  
いつも通りの仕事、いつも通りの帰宅時間。  
そしていつもと同じ電車に乗り、家へと帰る。誕生日だからといって、特別な予定もないし、ケーキや豪華なディナーもない。でもそれは自分で望んだ事だ。

最初は誘つてくる人もいた。けれど、片っ端から断つていらちに誰も誘わなくなつた。むしろ今の状態は心地良いくらいだ。

（……だって。食事に誘われても困るんだもん）

この年になつておかしいというのはわかっている。だから、親友にも打ち明けた事はない。

今まで恋をしたことがない、なんて。

男嫌いという訳ではない。

テレビに映つていてるような俳優を見ればかつていいと思つし、高校時代はあるバンドのおつかけまでやつていた。

それでも、ひとりの男性を好きだと思つた事がなかつた。

（まあ別にいいんだけどね……。恋愛しなくても死なないし。世の中にはお見合いで結婚する人だって多いんだし）

別に男嫌いではないから、親がつるさくなつてくれれば見合いでもすればいい。

恋愛なんて、面倒なだけ。そう思っていた。

そしていつも帰り道を辿り、自宅のアパートに着く。鞄から鍵を取り出すとして。

「ん？」

入り口のドアの前に、何かが落ちている事に気が付いた。

「なんだろ？」

黒くて丸い物体。しゃがんでよく見ると、小さく蠢いている。

「虫かな？」

田舎に住んでいた為に、虫が出たくらいで悲鳴を上げたりはしないが、じっくり眺める気にはなれない。持っている鞄で追い払おうと、ぱたぱたと仰いでみる。

「ほーら、あっちへ行けえ~」

そのときだった。

「貴様。何をする

若い男の、しかも偉そうな声が響いてきたのは。

## 異世界の王様？

「ん？ 今、何か聞こえたような」

首を傾げ、周囲を見渡してみるが、もちろん誰もいない。

「まさかこの虫が？」

「我を虫だと？」この無礼者め

再び、謎の声。響子はおそるおそる、扉の前に落ちている虫を覗き込んだ。

形はコオロギに似ている。大きさもそれくらいだろう。ただ、触角が銀色だった。

「今喋ったのは、あなた？」

「他に誰がいるのだ」

返ってきたのはやはり偉そうな声。

「なんでコオロギが喋っているの？」

「……我はコオロギではない」

ぶるり、と目の前の虫が震えた。いくら暖かくても季節はもう冬。虫（ではないと言い張っているけれど）にはつらい季節だろう。

「とりあえず寒いし、中で話そう？」

虫と話す、といつのも変だが、実際に声が聞こえるのだから仕方ない。

それに、不思議な出来事には結構慣れています。

潰さないようになつとコオロギを抱き上げ、鍵を開けてドアを開く。

電気をつけ、そしてすぐに暖房を入れた。手の中のコオロギを何処に置いたらいいか少し迷つ。

「床でいい。下ろしてくれ」

先程までの傲慢な態度とは裏腹に、静かな声が聞こえていた。それに素直に従い、響子はそつと床に置く。

「そなたは不思議な女だな。隣の部屋にいた女は、我を見た途端、

踏み潰そうとしてきたぞ」

隣のおばさんの顔を思い出し、響子は苦笑した。あのパワフルなおばさんに踏み潰されそうになるのは、とても怖いかもしれない。「まあ、さつきも言ったように慣れてるの。弟が色々と「みえる」子でね。不思議な話ならずつと聞かされてたから」

実家に暮らしている家族を思い出し、響子は目を細める。彼女自身にはそういう力はなかったが、弟の作り話だと疑った事は一度もなかった。世の中には、説明出来ないような事がきっとあるのだ。「でもさすがに自分が遭遇するのは初めてで、ちょっとびっくりしたけどね。それで、あなたは何者なの？」

「……」

「オオロギはすぐには答えなかつた。自分が何者なのか。その沈黙は、記憶を手繰り寄せるかのように長く。

「我は、王だ」

やがてぼつり、と呟いた。

「万の民を束ねる王だつた。だが、ある者が己の利益の為に我が国を滅ぼし、そして我は敗れ、封じられたのだ」

「お、おつさま？」

想像以上にファンタジーな話に、響子は少し戸惑つ。

だが、弟は言つていた。世界はひとつではないだ、と。ならば彼は、ここではないどこか別の世界に生きる王だつたのだろうか。

「王様の国は、なくなつちやつたの？」

「複数で急襲され、腹心の部下達も皆倒された。このままでは、あやつらも浮かばれん。何とか敵を取りたい」

小さなオオロギの震える声。

もし響子が男だったら、その話をそのまま信じる事はなかつたかもしれない。

だが中学生や高校生の頃、少女小説のファンタジーにはまつた経験のある響子は、仲間を思い、国を思つ王の言葉をすっかりと信じ切つてしまつた。

「あなたが私の部屋にいたのも、何かの縁かもしれない。何か手伝える事があつたら言ってね」

「そう告げた響子を、じつと見つめるコオロギ。

「ならば、我が元の姿に戻るのを手伝つてはくれないか?」  
なんだか様子が変だな、とは思つた。先程とは違い、こんなにも小さなコオロギから威圧感を受ける。だが、手伝つと言つた以上、断る事も出来ない。

「うん。いいよ」

そう答えた途端。

周囲が真つ暗になつた。何も見えない。自分の手すら見えない、深い闇。

「え? な、何よこれ……」

「そなたは我と契約した」

ふと、闇が退いた。現れたその声の主に従うかのように。  
まだ周囲は薄暗いが、それでも周囲が見渡せるようになつっていた。

顔を上げて、その声の主を見上げる。

そこには、ひとりの男がいた。

長い銀の髪。そして、まるで爬虫類のような紅い瞳。煌めく銀の髪を引き立たせる、褐色の肌。そして恐怖を覚える程の、壮絶な美。人間とは思えぬ者の姿が、そこにはあつた。

「ここは何処？』

「わ、私騙された？」

「騙してなどおらぬぞ」

彼は少し首を傾げる。優美なその身を包む装飾品が、しゃらりと音を立てた。

「偽りなく我是王だ。幾万の魔を従える、魔界の王」

そ、それはもしや魔王さまというやつでは？

「わ、私つてば。私つてば。もしかしなくとも、魔王の封印を解いてしまつた……とか」

封じられていた、と言つていた。そして魔王を封じた者は魔界を滅ぼした、とも言つた。

だとしたら、それは、その相手は。

「あの、もしかして魔界を滅ぼしたという人は……」

「天啓を受けし聖戦士。勇者ラール」

やつぱり勇者かッ！

響子はあまりにも想像通りの展開に溜息をつく。

「でも勇者でしょ。勇者が己の利益の為に魔界を滅ぼすつて事はないでしょ？ それにひとりに複数つて。やつぱ嘘じや」

「あやつらにもそれなりの思惑があつたのだ。それは天界の命に従つたのでも、人間を救う為でもない。そもそも我是人間界を滅ぼそうなどとしていないのだからな。それにパーティなどと言ひ、常に四人で我的部下をひとつずつ倒していくた」

「た、確かにゲームでも勇者はパーティ組んでるけど……」

そう言われてみれば、確かにひとりに複数で襲いかかっていると言われても仕方ないかもしれない。

「だめだめ、なんか納得させられそうな気がしてきた。と、とにかく私は家に帰りたい。ここ、何処？」

「そなたは我と契約した。我が契約を破棄するのならば、それなり

の代償を

「だ、代償って何かな……」

どうして迂闊に頷いてしまったのだろう。

後からどんなに後悔しても、もう遅い。

「魂を」

「ああッ。やつぱり！ 私のバカバカ。コオロギなんてほつとけばよかつたのに」

響子のその言葉に、魔王はほんの少し寂しげな瞳をする。

ただでさえ整いすぎた美貌なのに、そんな顔をされたら自分が悪いような気になってしまつ。計算しているのだとしたらとんでもない悪党だ。

いや、悪党に決まつている。何せ魔王さまだ。

「取り敢えず一度帰りたい。だつてほら、ストーブ付けっぱなしだし、玄関も開いたままだし……」

すると魔王は長い指をぱちん、と鳴らした。

「ストーブ、電気は消した。元栓も閉めた。施錠してガス、水道、新聞も止めた。会社に連絡して休職届も出した」

「そ、そこまで！」

冷蔵庫のものが腐らないように電気は止めない所が素晴らしい。

「じゃなくて！ 私、やつぱり帰れないのね。ここは何処なんですか……」

「（こ）はかつて魔界であった場所。今は何もなくなつてしまつた。ここに、我が国を再建する」

改めて、響子は周囲を見渡した。広い。こんなに何もない場所で、地平線を見るのは初めてかもしれない。とても広く、そして寂しい場所。

「ここに、あなたの王国があつたの？」

「ああ」

打倒勇者ではなく、国の再建ならばまだいいかもしない。

響子は仕方なく、しばらくこの場所に留まる決意を固めた。それ

「どう逆らつたとしても、帰してはくれないだらつ。

（急に行方不明だなんて、みんな心配するだらうなあ。『めんね……』）

そこである事に気が付き、ん？ と首を傾げる。

休職届まで出し、ガス、水道、新聞まで止めて。それは、行方不明とは言わないだらう。

「ど、どう考へても私、自分の意志で失踪してゐるじゃんつつ「しかも家を出たところを見た者は誰もいない。完全失踪マニアルもびつくりだ。

「どうかしたのか？」「

「い、いえ。ただ、家族が心配するだらうなあ、と思つただけです

……」「

がつくつと肩を落とした響子に、魔王はある物を差し出した。それはとても見覚えのある。手に馴染んだ……。

「これで連絡すればいいだらう？」「

「」、これは。私の携帯電話。え？ 通じるの？ 携帯通じるの？

半信半疑で携帯を開く。

すると、馴染んだメールの着信音。

「うわ、通じた。ほんとに通じたよ？」「

「これくらい造作もない」

少し得意そうな魔王。その様子に、響子も思わず頬を緩めた。（ちょっと可愛いかも）

だがこんな表情すらも罷なのだろうか。そんな事を考えながら、メールを開く。

お誕生日おめでとう。たまには帰つておいでね。

少しそひつない、母からのメールだった。

（『めん、お母さん。いつ帰れるか、わかんないかも……』）



## 想像通りに？

「ところで、私は何をすればいいの？ それをやつたら家に帰れるんでしょ？」

気を取り直して、魔王に向き直る。

何もない、無限に広がっているかのような暗闇。

魔王の傍だけはほんの少し明るい。その微かな灯りに引き寄せられるように、響子は彼の傍へと寄つた。何もない暗闇を見つめていると、自分が無くなつてしまつよう恐怖を感じた。

「帰れるかどうかは別として。お前に頼みたいのは、想像する事だ」「想像？ 創造じやなくて？」

魔王は響子を見下ろす。その視線を受けて、随分背が高いんだな、と場違いな事を考えていた。銀色の髪はこれほど長さにも関わらず、まったく絡み合っていない。纖細な金色の鎖に飾られたその髪に、知らずに手を伸ばしていた。

（三つ編みとかしたら、怒るかなあ……）

そう思った瞬間、魔王の手が響子の手を握った。すると。

「あ、あれ？」

魔王の綺麗な銀色の髪はひとつに纏められ、緩く三つ編みにされていた。

「え？ 何で？」

彼は特に驚いた様子もない。手を放して自らの髪に触れ、響子を見下ろす。

「この方が好きなのか？」

「す、好きつていうか。ちょっとそう思つただけで……」

「お前がそう思つたからこうなつたのだ。ここには今、何もない。そして我的力は未だ完全に解放されておらず、自分の想像した通り

に国を再建する事が出来ないのだ」

「ええと、つまり……」

響子は空を睨んだ。考え事をする時の癖である。そのせいで何度も知らない友人を怯えさせたかわからない。それくらい迫力のある顔をして考え込んでいる。

「……私に想像して欲しいってことは、あなたは今、自分で考えた事を実行する力がないのね？だから、私にこの国をどう再建するか考えて欲しいってこと？」

「その通りだ」

彼は微笑んだ。自分の意図を、正しく響子が理解した事に満足したような笑みだった。

その綺麗な微笑みに見惚れながら、想像するだけでいいのなら簡単だと思う。国を無事再建させれば、彼も自分を元の生活に帰してくれるだろう。

だが。

どんな国にしようかと考えを巡らせていた時に、ある問題に直面する。

（ま、魔界を再現しちゃつてもいいのかなあ……）

想像しないと帰れないとはい、自分が魔界を再建したせいで魔王が完全に復活し、世界を支配してしまったりしたら。

（さすがにちょっと、後味悪いもんなあ）

隣にいる魔王を見上げる。

「どうした？」

「いやあ、なんていうか。魔界っぽい世界を再現するのは、私みたいな女の子には、無理かなあーって」

友人が送ってきたメール。四捨五入で三十路の文字が頭の中を三往復するが、それを頭の中で何度も踏み潰し、女の子、を強調してそう告げる。

「お前が想像している魔界がどういうものかはわからないが、そんなに難しく考えなくても良い。いつも見てているような風景、暮らしてきた町と同じで構わない」

「え？ そうなの？」

「お前が過ごしやすい国。住んでみたい城。それでいい。自分の思い通りに想像するといい。我がそれを再現する。生涯住む場所になるのだからな」

魔王とも思えぬ優しい声に、どうしたらいかと悩んでいた心が少し樂になる。自分の住みたいような、暮らしたいような場所を想像したらいいとこうのならば、簡単だ。

（どうせなら悪い事をする氣も起らなくなるような、メルヘンな世界にしてみようかしら）

綺麗な花畠に、ヨーロッパの古城のような城。

けれど中は現代風に住みやすくなつていて、テレビにパソコン、冷蔵庫やホームシアターもあればいいかもしね。もちろんインターネットも通じている。

「動物も飼いたいなあ。猫に犬に<sup>アヒル</sup>。あとは鳥も」

小鳥の鳴り声が聞こえる縁の多い国。誰が魔界だと思つだらうか。きっと勇者だつて思はないに違ひない。

魔王が響子の手を握つた。すると、想像した通りに綺麗な花畠が目の前に現れる。

「うわあ、綺麗。一面の花畠つて、よく物語には出でくるけど、実際は見る機会ないからねえ。うん、すつごく綺麗」

その光景に満足し、今度は大きな城を想像してみる。もちろん、中は現代風だ。

響子の想像した通りに、城はたちまち目の前に出現した。まるで遊園地にある城のようだ。

「わあ……」

ここが私が生涯、住む城になるのか。満足そうに見上げ。響子はふと、ある事に気が付いた。

「しょ、しょ、生涯つて何？ さつき言つたよね？ 生涯住む場所つて、言つたよね？ わ、私やつぱり帰れないのか！」

## 騙されてないか？

魔王に詰め寄つても、彼は言つた事を忘れてしまつたかのよつて  
知らん顔をするだけだ。（本氣で忘れているなら痴呆症だわ……）  
どんなにいい男でも、中身はコオロギ……じゃなくて、勇者に討  
伐された魔王なのだ。（あんまり油断しない方がいいかもしけない）  
自分の思い通りに力を使えない。それが枷になつていて、今はま  
だ大人しくしているだけなのかもしれない。

いつそ悪い事など想像出来なくなつてしまつべからべ、メルヘンな  
魔界にしてやるうか。「ところで魔王様」

「何だ？」

「魔界の住人つて誰もいないの？」

確か幾千の魔を従える魔王と言つていた。だが、この無駄に広い  
空間には、人影（魔影？）はまったく見えない。

「魔界が消滅すれば彼等も消え去つてしまつ。だが、再建すればい  
ずれ甦るだろ？」「う

「ふ、ふーん。そつなんだあ……」

それはやつぱり、魔界を再建させたらマズイのではないだろ？  
「ぐ、国を再建させたら、やつぱり勇者に復讐とか、したいと思つ  
ちよ……。思つてる？」

緊張して思つたり噛んでしまつた。そつと魔王を上田遣いで見  
つめる。

「そんな事は思つてはいない」

彼はそう答えた。

「我はただ、国を再建させたいだけ。この国に住まつ者を甦らせた  
いだけだ。勇者などいりでも良い」

本心だらうか。

疑つよつな響子の視線に、彼は柔らかく微笑んでみせる。

「本當だ。疑われるのも無理はない。だが、我には最初から争つて

もりはなかつたのだ。攻め込んできたのは彼等の事情。一度魔界を滅ぼし、その目的を達成させたのだからもう来る事もないだろ？」「美形の笑み、しかも少し憂いを含んだそれは、どうしてこう説得力を宿すのだろう。

そうよね、悪いのは彼等よね、と言いたくなるのを必死に堪える。そして、尋ねた。

「じゃあ、彼等の事情って何？」

ほんの少しだけの沈黙。そして彼は告げる。

「長い話になる。中でゆっくり話そう」

今建てたばかりの絢爛豪華な城の中に、魔王に手を引かれて入る。（それにも……）

想像したのが少し恥ずかしくなるくらい、豪華な城だ。磨き上げられた美しい床の上を、銀髪の美形に手を取られて歩く。まるで夢のような光景だが、夢ではない事を切に願う。

（お城に美形の王子様つて、二十五歳の女が見る夢にしては痛すぎること……）

実際には王子様ではなく、魔王様だが。

その魔王は、まるでこの建物の構造を知っているかのように、響子の手を取つて城の中を導いていく。

やがて日当たりの良い応接間に辿り着いた。

身体が沈むくらい柔らかなソファーに、魔王に手を取られたまま腰をかける。

何だか喉が渴いてきた。

（お茶を煎ってくれるメイドさんがいたらいいのに）

そう思つた瞬間だつた。

目の前に、ティーセットを手にしたメイド服の美女が現れたのは。

「わ？」

あまりのタイミングの良さに驚き、そして気が付く。魔王は響子の手を握つたままだつた。いくら響子が想像しても、手を握られている時でないと魔王には伝わらない。タイミングがあまりにもよ

きた。彼はそれすら予想していたのだろうか。

ちらり、と目の前に現れた女性を見つめる。

スカート丈のかなり短いメイド服。だが、すらりとした長身にそれはとても良く似合っている。長い真っ直ぐな髪は、まるで絵の具で染めたかのようなピンク色だった。緑色の瞳が、響子を見つめて微笑む。魔界の住人には違いないだろう。けれど、その微笑みは柔らかく、親しみすら感じられる。

そのメイド服の美女は、優雅な仕草で響子の前に紅茶を置いた。そして潤んだ瞳で見つめる。

「魔界を救つて下さり、ありがとうございます。私も甦る事が出来ました。これからは、響子様にお仕え致します」

田の前に魔界の王たる魔王がいるといふのに、彼女はそちらを見よつともしない。ただ感激したように響子を見つめているので、少しへまりが悪くなり、魔王を見上げた。

だが彼も満足そうな笑みを浮かべるばかりだ。

（私……。騙されてたりして……）

こくり、と紅茶を一口飲む。それはとても良い香りだった。

## 何処までが本当なの？

「ところで、勇者の事情つて何だつたの？」

「そうだ、それを聞きに来たんだつた。

紅茶のおかわりを注いで貰いながら尋ねる。

「ああ。 そうだつたな」

革張りのソファーに足を組んで座つていた魔王様が、思い出した  
かのように頷く。

（本当に忘れっぽいだけだつたりして……）

その足を組んで座つている姿が、嫌味なくらい絵になる。

「魔界を滅ぼしたのは、前にも言つたように勇者ラールだ。だが、  
勇者といつても実際はただの教会に仕える小娘。剣は多少使えるよ  
うだつたが、魔力はまったくなかつた」

女？ 勇者つて、女だつたのか。

「そんな女がどうして勇者と呼ばれるようになつたの？」

紅茶のおかわりと一緒に、焼きたてのクッキーが出てきた。これ  
がまた、甘い香りで食欲をそそる。

「能力的にはたいしたことのない女だつたが、希有な力があつた。  
天界の者と会話する事が出来たのだ」

「……なるほど。だから天啓を受けた勇者つてことになつたのね」  
メイド服の美女にかいがいしく世話を焼かれながら、銀髪の美形  
が語る話に耳を傾ける。そうしていると、だんだん勇者達が悪いよ  
うな感覚になつていくから不思議だ。

「その天啓を受けた天神ラフィーダと恋に落ちた勇者は、天王に自  
分が天界に行くには善行を成し遂げなければならないと言われた。  
それも、普通の人間が出来るような善行では駄目だ。そこで天界と  
長い間争つている魔界を滅ぼそつとしたのだ」

「ぬわ……。自分の恋の成就の為にひとつの大を滅ぼしたのか。あ

くどいなあ

たかが恋で、と呟く響子を、魔王もメイド服の美女（名前を聞くのを忘れてた）も不思議そうに見つめている。

「え？ 私、何か変なこと言つた？」

「人間の、特に女性という者は、恋愛中心に生きていると思つていた」

魔王の答えに、それも偏見だなあと思いつつ、響子は何も返せない。

恋を、したことがないから。

そこまで深く、誰かを愛したことがないから。

「まあ、人間も色々いるつてことよ。たまたまその、勇者になつたひとが恋に生きる女だつたのね」

そう返すしかなかつた。

それにも、と話題を変えるように、声を大きくする。

「いくら天啓を受けたからつて、ただの教会に仕える女性に、魔界を滅ぼす力があつたの？」

それに答えたのは、メイド服の美女。

「ただの人間の小娘だからこそなのです。魔界と天界は、不俱戴天の敵同士。人間と恋に落ちた天神ラフィーダも天界一の戦士であり、長い間魔界と戦つてきた天敵とも言える存在でした。けれど天界の住人はもちろん、魔界の住人にも人間を害する事は出来ません」

「ちょ、ちょっと待つて」

話を途中で遮り、響子は一口、紅茶を飲んで心を落ち着ける。

何だか話がとんでもない方向になつてきた。

「天界とか魔界とか、まるでティーン向けの小説みたいなんだけど。まあ、魔王さまがいるんだから天神とかがいてもいいのかもしれないけど。えーと、取り敢えず頭の中を整理するからちょっと待つてね」

落ち着こな。

数回深呼吸して、響子はまずメイド服の美女に問いかける。

色々と情報が多くて混乱している。

それに魔王やメイド服の美女の話も、最初よりも少し、食い違つているような部分もある気がする。

何でも疑つてかかるのも問題かもしれないが、すべてを信じるのも危険かもしれない。

ひとつずつ情報を整理していく。

このまま都合の良い話だけを聞かされて、利用されるのは嫌だ。響子は、気になつていてことからひとつずつ、尋ねていく。

「まず聞きたいこと。あなたの名前は？」

「私はリリスと申します。魔界が天界の戦士と勇者に攻め込まれたとき、私も殺されてしましました。ですが、響子様の御陰で甦る事が出来たのです。本当に、感謝しております」

美女に潤んだ瞳で見つめられ、思わず胸が高鳴る。  
(まてまてまて、恋に田覚める前に同性に田覚めてどうするんじや  
(い)

いえいえ、どういたしました。などと思わず口走り、そして魔王に視線を移す。

「それで、魔王様には名前はあるの？」

「もちろんある。だが、我を名前で呼ぶ者などおらん。だからお前も知る必要はない」

「……ふーん」

なにやら怪しい。響子はまずひとつ、と心の中で呟く。もちろん魔王からは離れ、考えていた事が伝わらないよつこじた上で。

一、魔王の名前にに関する情報を集める。

「それで、もうこじ確認ね。私と出合った時、魔王様は腹心の部下の敵を取りたって言つてたよね。でも、こじに着いた時は勇者

に復讐する気はない、魔界を再建したいだけだつて言つた。どう  
が本音なの？」

「ずい、と詰め寄る。

「協力するつて言つちやつたし、魂を取られるのもヤダから出来る  
事はするつもり。でも、騙されたり誤魔化されるのは嫌なの」

なんでそんな話になるの？

言いたい事はすべて言つた。

きつぱりと言い切り、さあ答えてみろと言わんばかりに真正面から魔王を見据える。（やつぱいい男だなあ、と思いつつ）

そんな響子の態度を見て、魔王はやんわりと笑みを浮かべた。

「ふ……。どうやら馬鹿ではないらしいな」

ようやく本性を現したか。心のチェックリストを更新だ。

## 一一、魔王の本音を探る

「この見えても見た目ほど馬鹿じやないの。残念だけど。で、あなたの本心はどうちなのか聞かせてくれる？　じゃなきや私、協力なんか……」

メイド服美女のリリスは天界の住人はもちろん、魔界の住人にも人間を害する事は出来ないと言つていたが、何処まで本気かはわからない。けれど、彼等が自分の協力を必要としているのだけは、確かだ。少しくらい強気に言つても……。いや、これくらい言わないと良いように使われるだけだろう。

「残念つていうのは見た目が馬鹿に見えるという、そこか？」

「違うわッ。変なところにつっこむな！」

怒鳴つてから、ベースを崩されていると気が付き、真顔になる。「教えてくれないのなら、私だつて協力なんかしないんだからね」響子が本気だとわかつたのだろうか。魔王は、少し体勢を起こして（今までソファーに転がっていたのだ、人が真面目に話をしているというのに！）語り出す。

「……別に、深い意味などない。ただ

「ただ……？」

「思いついたままを言つていただけだ」

「はい？」

「これだけの美形、しかも何やら怪しい雰囲気すら漂わせている魔王様だ。天界とやらを征服する、くらいは言ひそうだと覚悟していたというのに？」

「それってつまり？ その時は復讐してやりたいと思つてたけど、魔界が復興していくのを見てたらどうでもよくなつたとか？ ま、まさかね。そんな筈……」

「うむ。お前の言つ通りだ。案外簡単に復興出来そうだからな」詳しく述べる前に理解した事に機嫌を良くしたのか。魔王は満足そうに笑う。

その笑み。

まさにすべてを手に入れた王者が浮かべるに相応しい、満ち足りた笑みだったが。

「アホかーっ」

響子は立ち上がり、力一杯叫ぶ。

「なんでそんなにテキトーなの？ あなた魔王なんでしょう？ そんなでいい訳？」

「ふ。我がもし、優れた王ならば。色呆けした天界の戦士などに負けたりはせん」

「な、なんでそんな駄目な方向に自信満々なの？ あなたがこんなじや、部下達はさぞかし苦労を……」

目が合つた。それこそ、先程の魔王の比ではない。

よぐぞ言つてくれたと言わんばかりの、リリスの感動に潤んだ美しい瞳。

（ぐ、苦労していたのね……）

「……なんだろう。かえつて騙されたままの方がよかつた気がするのは」

虚しく呟いてみるものの、聞いてしまつたものは仕方ない。（そうよ。考えてみたら、これだつて私を騙す嘘かもしれないじゃん！）

そう思つてみるものの、あの魔王はともかく、メイド服美女の涙は本物のような氣がする。

だが、その後に魔王が言つた言葉の衝撃は、予想を遙かに超えていた。

「つまり、色々と面倒になつてな。ついでにこの国をお前に任せてしまおうと考えてゐるんだが」

「……へ？ それってつまり？」

「新しい魔界の創造主。女王となり天界からこの国を守つてくれえーと、それってつまり……。丸投げですか？」

（じょ、「冗談じゃないッ。そんなもの押しつけられてたまるもんですかッ）

しかも理由が面倒、だなんて。そんな花見の場所取りや飲み会の幹事みたいなノリで押しつけられるようなものでもない。

「恐れながら」

だが、響子より早く魔王に進言してくれた者がいた。メイド服の美女、リリスだ。

「響子様はか弱き女性でござります。魔神の中には氣性の荒い者もありますので、いかに魔王様が認めた後継者であろうとも、素直に従わぬ者もいるかもしれません」

やはり彼女は自分の味方だ！ とそれに同意するよつて思ひ切り頷いた。だが、

「そこで私に考えがあります。響子様を、恋人になさつたら如何でしょ？ 魔王様の恋人が魔界を救い、自分達をも甦らせてくれたのだと知れば、皆、響子様を敬い、忠誠を誓うでしょ？」

ちよつとまで、なんだその美談は！

こつちはこの非道な魔王に魂を取るぞと脅されて、仕方なく協力してゐるのというのに！

だが、さつきの天界人を馬鹿にしたような口調から察するに、魔王本人は恋愛とかにはまったく興味がないようだ。（これが唯一の共通点なんだけど）

きっとくだらぬと一蹴するに違いない。いや、そつとして欲しい！  
期待を込めて、振り向く。

かなり本気ですね？

けれど願いといつものほ、大抵は叶わないものだ。

魔王は特に考えもせず、それでいいか、などと呟いた。

（しまつた！ 逆に興味がなさすぎてどうでもいいのかッ）  
だが、恋をしたことがないと言つてもそれなりの憧れは抱いてい  
る。いかに美形といえど、面倒そうにお前でいいなんて言われても  
嬉しい訳がない。

「ヤダ！ 私は絶対に嫌だからね！ 誰が恋人になんかなるもんで  
すか」

思い切り否定する。

「き、響子様……」

リリスがこの世の終わりのような絶望を込めた瞳で、見つめてく  
る。

「どうしてですか？ どこがお気に召しませんか？ 魔力も強いし  
美形だし、なかなかの優良物件ですよ？」

思えば彼女は、必死だったのかもしれない。

まだ甦った魔族は自分だけ。しかも、魔王にはやる気がない。ど  
れだけこの先自分が苦労するか、想像しただけで気が遠くなる思い  
だつたのだろう。溺れる者は藁をも掴む、の心境だ。  
でもいくらリリスがメイド服の美女でも、それを受け入れたら苦  
労するのは自分になつてしまふ。

「確かに美形だけどね。誠意が足りないのよ、誠意が！」

お前でいいか、なんて言われて喜ぶのは、よっぽどのマゾ女だけ  
だろう。

「せ、誠意ですか……」

その言葉を聞いた途端、リリスは目を反らす。

「誠意はちょっと、持ち合わせが……」

なんて正直な魔族だ！

でも、ここを攻めれば回避可能かもしれない。

「顔がいいだけじゃ駄目なのよ、男は。むしろ顔がいいからこそ、余計に嫌つてこともあるのよね。男は誠意！ これに限るよ、うん」  
勝ちを予測した響子はその後も色々と言い続ける。だが、ここで予想外の展開が起きた。あまりにも言われ続けてさすがに気に障つたのか、魔王が反撃してきたのだ。

「まあ、我もどうせならもう少し若くて素直な女の方が……」「なんですって？」

ぴたり、と響子の動きが止まり、ふるふるとその肩が震える。もちろん、魔王の言葉にショックを受けたのではない。

「ふ、ふふふふ」

地獄の底から響き渡るような低い声。何事かと、リリスが怯えたような瞳をする。

（き、気温が下がった？ 寒い……）

ひんやりとした空気の中に響く声。

「よくも、よくも微妙な年頃の女性に年齢の話をしたわねえええ」  
許さないから、と響子は笑みを浮かべる。

「絶対に許さないつ。後で後悔したつて遅いんだからね！」

「お前こそ撤回するのなら今のうちだぞ」

売り言葉に買い言葉。ついむきになつた響子はいつのまにかこんな宣言をしていた。

「絶対にあなたの方から恋人になつてくださいつて言わせてみせるんだからー！」

（ああ、私のバカ……）

あれから、一時間後。

ようやく怒りが収まつた響子は、激しい自己嫌悪に襲われていた。豪奢な部屋の、ふかふかのソファーに身を投げたまま何度も溜息

をつべ。つゝその場の勢い？で、魔王と賭けをしてしまったのだ。

お互に、相手をその気にさせてみせる。好きになつた方が負け。

負けた方は、相手の言う事を何でも聞く、といつ賭けを。

「あーん、もう私のバカバカ！恋すらしたことないのに、どうやって相手をその気にさせるのよ！」

ソファーから身悶えしながら転げ落ち、上等な絨毯が敷かれている床の上をゴロゴロと転がる。

「そもそもあのコオロギ野郎が、年齢のことなんか言つから！　あーもー、なんで男つて若い子が好きなのさ。むかつくつ！」

今度は床の上に仰向けになつたまま手足をばたつかせる。

「ああ、でもこんなに憎いなら、じつちから好きになる事は絶対にないから負けないかも。相手が美形つてだけで恋が出来るなら、とつくにしてる筈だもんね」

そりだそりだ、とひとりで咳いていると、頭上から声がした。

「……床の上で何を暴れてるんだ？　響子？」

笑いを含んだ柔らかい声。

（ん？　誰だろう？）

優しい声だつた。転がつたまま見上げると、そこには。

「げ……」

絢爛豪華な装飾品をあしらつたファンタジー風の衣装ではなく、普通の服装をした魔王の姿。銀色の綺麗な髪はゆるく三つ編みしたままで、黒いVネックのセーターによく映えている。紅い瞳を隠すように掛けている、少し色のついた眼鏡。端正な顔立ちで、まるで恋人を見つめているかのように優しい笑みを浮かべていて。

（くつ……。こいつ、かなり本気でやる気だ……！）

引き攣つた顔に、冷や汗が流れる。負けてられない！

## 言わなきやよかつた？

「響子、あんたいつたい何してるのよ?」

携帯電話から響く友人の声に、身体が沈む豪華なソファーに座った響子は溜息をつく。

「ねー……。ホント、何やつてるんだろ、私は」

取り敢えず魔王から逃げて自分の部屋と定めた場所に逃げ込むと、とてもいいタイミングで携帯電話が鳴っていたのだ。

そういうや携帯通じるんだっけ、と思って出てみると、誕生日にこんでもないメール（四捨五入で三十）のメールをくれた友人で。「会社には休職届け、しかも部屋には鍵がかかって誰もいない。一応心配したんだからねー？」

そこは一応つてつけなくともいいんじゃないだろうか。

「で、今あんたは何処いるのさ」

「ん? んーと、なんて言えばいいんだろ?……」

魔界です、なんて言える筈もない。ちょっと引いた口調で、もうそういうのは卒業しようよ、いい年なんだから……と言われるのがオチだ。

「えーと、ホテル?」

「なんで疑問系なのよ……」

彼女、美香子とは高校生の時からの付き合いだ。もちろん同級生なのだから同じ年なのだが、一月生まれで年としては一年違うので、何かにつけて響子を年寄り扱いする。

たかが一年なのに。だが彼女に言わせると、全然違うらしい。（まあ、もう年の話はいいのよ。それよりどうやって説明すればいいんだろ?……?）

一応とはいって、心配してくれているのだから何も説明しない訳にいられない。

「ええとですね。実はある人に付いてきて、ちょっと遠い場所にい

るんですよ

「何よ、ある人って。……まさか、男か！」

違う、と言おうとした。

男ではあるのだが、魔王さまだし。

けれど響子よりも早く、美香子が否定した。

「なんてね。そんな訳なかつたね。ごめんごめん。だつて響子だし。どうせ親戚のおばちゃんか何かに呼び出されたんでしょ。響子だし

ね」

恋愛をしたことがない、と打ち明けた事はなかつた。

だから今まで一度も彼氏が出来たと言つたことはなかつた。

でもそんな、のたのくせに生意氣だぞ、みたいな口調で言われたら、黙つてはいられない。

それに。

（あんただつて、大学の時を最後に今まで彼氏いないじゃんかよ！）

「ふふ」

ここに、多くの言葉はいらない。

ただ少し勝ち誇つたように笑うだけでいい。

その効果は抜群だつた。

「な、何よその勝ち誇つたような笑みは。……ま、まさか本当に男なのが？」

「さあね。まあ、」想像にお任せします。じゃ、忙しいからまたね

ー

そう言つて、電話を切る。美香子はひとり、色々と想像して悶々とするだろ。誕生日当日にあんなメールを送つてきた報いだ。そう、それで終わる筈だつた。

それなのに。

「ちよつと待ていいいいいい

「へ？」

「それ……本当？」

今まで一度も聞いたことのない、友人の低く押し殺した声。

(な、なに? 何が起じたの? )

「み、美香子?」

「本当かどうか、聞いてるのよおおお  
ばしん、と机を叩く音がした。反射的に背筋を伸ばして答える。

「ほ、本当よ。男の人なのは、確か。でもね……」

「会わせて

はい?

言わなきやよかつた、と後悔したのは今田ド一回田だ。とことん  
学習しない女よね、私つて……。

「会わなきや信じない。だつて響子に男とか……」

どういう意味だ。

でも、ここでまた後悔するよつたな発言はしたくない。慎重に、言  
葉を返す。

「会わせてつて言われても、私、ちょっと遠い所に……」

「あ、そつ。もしかして嘘なの? ヤダなあ。別に今更、そんな嘘  
言わなくても私はわかつてゐつて」

「今更つてどうこうことだ!」

「いいわよ。今すぐ行くから後悔するなよおおお  
電話を切つた後、後悔したのは自分の方だった……。  
どうするの、これから……。

## その笑顔は反則ですよ？

響子はウロウロと、部屋の前の廊下を歩き回っていた。部屋の中にはいるのは魔王様である。

けれど、ここにどうしたらいいかわからず歩き回っているのなんてわかっている筈なのに、彼は沈黙を守っている。

（どうしたらいいんだろ……。もう、なんであるな）と呟きながら

（たのかなあ）

今すぐ行く、などと言つてしまつたのだ。これ以上待たせたら憐憫の声で、今更無理しなくともいいんだよ。今更、などと言われるに違いない。

（そうだ、別に恋人だつて言つたんじゃないんだし、あつちに連れて行つて貰うだけでいいんじゃない？ 家に来いつて言つとこでさ。うんうん。会わせるだけでいいんだし）

幸い、今の魔王様は瞳と髪の色は特殊だが、ファンタジー系の衣装ではない。外人だ言えばきっと大丈夫だろつ。

（だつて美香子だしね……）

ようやく覚悟を決め、こんこんと部屋をノックするが返事はない。

「入りますよ～？」

がちやり、ヒドアを開ける。すると魔王様はソファーに寝そべつたまま、真剣に雑誌のような本に目を通している。

（何を読んでるのかな？）

響子が入ってきたにも気が付いていない。それほど熱心だった。

「あのお……。ちょっとお話があるんだけど、忙しい？」

ちらり、と彼が手にしている雑誌に目を向ける。

「……へ？ な、何を読んで……」

彼が手にしていたのは。

「ふーん、るぶふたりの東京デート、かあ。……つて、何でそ

んなもん……」

旅行雑誌で有名な「るぶ」が、そんな雑誌を出していたとは知らなかつた。それ以前に一度も「デートなるものをしたことがない。いや、今はそんな余計な告白をしている場合ではなく。

「ままま魔王様。なんでそんな雑誌を読んでるの?」

「ん? 韶子か」

その絶叫でようやく気が付いたように、魔王様は顔を上げる。「リリスが持つてきた。なかなか面白いぞ」

美しいメイド服の魔族を思い浮かべ、がっくりと肩を落とす。(どういうつもりですか、あの人は……。いや、人じゃないんだけ

ど)

彼女にしてみれば、こんな手の掛かる魔王様よりも、新しい創造主、女王の誕生に期待を込めているのだろう。そしてそれには、魔王が響子を恋人にすることが必要だ。

「ふ……。援護射撃つて訳ね。でもね、魔王様。残念ながら「デートスポットなんて行かないわ、私は」

もちろん見飽きたとか、そんな理由ではない。一度も「デートしたことがないのだからそれはない。

理由はひとつ。恥ずかしいからだ!

行つたことがないから予想でしかないけれど、きっとそういう有名な場所には若いカップルしかいないに違いない。そんなところにわざわざ行くもんですか!

「……別にお前と行くとは言つてないが」

「な……!」

なんでこう、人をカッとさせるのが上手いんだろう。さすがは魔王様。けれど何気なくこちらを見たその魔王様が、突然態度を変えれる。

「いや、もちろん誘おうとは思つていた。だが、お前の好みではなかつたらしいな。残念だ」

きつと途中で賭けのことを思い出したに違いない。といふか、忘

れるくらい夢中になつて読んでいたのか、魔王様は。

（そうだ。これを利用して連れ出せば……）

「やはり、と笑う。偶然を装つて美香子に会わせれば、それでミッショングクリアだ。

「私の住んでた町にも綺麗な景色の場所、結構あるよ。よかつたら見に行かない？」

即答ではなかつた。彼は銀色の髪をさらりと搔き上げて、考え込んでいる。先制攻撃をされたと思つてゐるのだろうか。

「べ、別に行きたくないならいいんだけど。ただ、そういう雑誌に載つてゐるのつて大抵景色の良い場所でしょ？ 行きたいのかなつて思つただけだし」

怪しまれないようにそつと言つたつもりだったが、これじゃまるでツンデレキヤラだ。

（うーん、やつぱり駄目か。正直に言つた方がいいのかなあ……）

魔王様にお願いするか、美香子に謝るか。

どつちかを選べと言われたら迷つまでもなく魔王様だ。

「えつと……」

実は、友達に紹介しろと言われまして。

そう言つつもりだつた。けれど、顔を上げた響子の瞳に映つたのは。

「ああ、行つてみたい。連れて行つてくれるか？」

何度も見た皮肉そうな笑みではなく、淡く微笑む彼の姿。

その笑顔は反則だらう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3076p/>

---

恋人は魔王さま？

2011年2月26日22時41分発行